
初音ミクの消失 ～約束～

おにぎり（鮭）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

初音ミクの消失 ～約束～

【Nコード】

N6274Z

【作者名】

おにぎり（鮭）

【あらすじ】

初音ミクの消失を元に書いてみました。

あまり歌詞通りには書かれていない上、クオリティに関しては保証できません。

それでも大丈夫な方は、覗いてってください。

（前書き）

夜中のノリで書いてみたので、ちょっと訳わからないかも…
まあ、興味のある方だけLet's GO！

- もう…一度…だけ -

私の名前は初音ミク。ボーカルアンドロイド、通称ボーカロイドの一人。

私達ボーカロイドの役目はマスターの思いを歌声に乗せて表現すること。

もちろん私もその役目を果たしていた。

…でも私にとって歌う事はもう役目じゃなくなっていた。

マスターが私の声を好きだと言ってくれたその日から、私にとって歌を歌う事は『役目』から『幸せ』に変わっていった。

始めからマスターがそんなことを言ってくれた訳じゃない。

最初は全然上手く歌えなかった私にイライラして怒ることや喧嘩することも決して少なくなかった。

でも、そんな『役目』すら果たすことが出来なかった私を側でずっと優しく支えてくれたのもマスターだった。

だから、マスターの喜ぶ顔が見たくて一生懸命歌の練習をした。

いつからか私達は単に歌を与える人間と歌を歌うアンドロイドと言っ関係ではなくなっていた。

マスターのために私は歌い、私のためにマスターは歌を作ってくれた。

動画を上げてても決して再生回数がランキングの上位に届くことは

なかったけれど、私達はそれでも幸せだった。

…いつまでも、こんな時間が続くのだと思っていた。

・
・
・

「マスター！おはようございます！」

「ああ、おはようミク」

いつものように朝の挨拶を交わす私とマスター。でもマスターはとても疲れた顔をしていた。

…その原因は私にある。

マスターといつまでも一緒にいられると思っていた矢先、私の体の中に新型のウイルスが入っていることが分かったのだ。

ウイルスは私の体に入ってからすぐに私のプログラムを喰い荒らし始めた。

始めは私も気がつかなくて、ただ調子が悪いだけだと思っていた。マスターには黙っていた。

だって大好きなマスターに心配をかけたくなかったから…

でもそれが逆にマスターを傷つけることになってしまった。私の体の中にウイルスが入っていると分かった時、既に私の命とも言える歌声の部分のプログラムはほとんど破壊されていた。

私は『役目』を果たせなくなったと同時に『幸せ』も失った。

それでもマスターは私のことを何とか修復しようと企業に連絡を取ってみたい、修復の方法を探してくれたけど、何しろ今までに類を見ない新型のウイルスが相手では、手のうちようがないみたいだった。

「ごめんな…ミク…ごめんな…」

誰よりも私に優しくしてくれたマスターが私に涙を流しながら謝ったとき、私は

「どうしてすぐにメンテナンスをしてくれなかったんですか！？もしもっと早くメンテナンスしてたら治ってたかもしれないのに！！歌えないボーカロイドなんてただのデータの圧迫要因でしかないじゃないですか！！」

と、自分の身勝手な苛立ちをマスターに八つ当たりしてしまった。

もう二度とマスターのために歌を歌えない。

それはボーカロイドとしての『役目』を果たせなくなるだけでなく、「私」の『幸せ』を失う事を意味していたから…

「マスター、今日は何をするんですか？」

「んー、今日は久しぶりに曲でも作ろうと思ってる」

「曲…ですか？…でも私…」

「それ以上言うな。もう二度と歌えなくなったらって決まった訳じゃないだろ？」

もう私が二度と歌えないのはマスターだって重々承知しているはず。それどころか、最近は記憶のプログラムまでが破壊され始めたからマスターとの大切な思い出が少しずつ剥がれ落ちていくのを感じてしまうほどだった。

それでもマスターは私が治った時のために歌を作ってくれるらしい。

「…どんな歌を作るんですか？」

私の問いにマスターは

「…どんな時も希望を忘れない歌、かな」

と、少し悲しそうな目をしてそう言った。

「マスター！頑張って下さいね！私、またマスターのために歌を歌えるなら頑張れますから！」

もちろん理屈ではそんなことは不可能だと分かっている。

でも心ではもう一度、もう一度だけでいいからマスターの作ってくれた歌を歌いたいと思っていた。

（もう一度だけでいい。マスターのために歌を歌えるなら…この体が消えたって…）

ひそかにそう決意した私を、凄まじい痛みが襲う。

「あう…うう！」

「み、ミク！！大丈夫か！？」

マスターの声が遠くで聞こえる。

（…嫌…消えたくない…まだ…マスターの…歌…歌って…）

思いも虚しく、私の意識はそこで途切れた。

・ ・ ・

次に私が目を覚ました時、もう自分が消えてしまうことを悟った。

「ミク……」

ディスプレイの向こう側で、心配そうな表現をしながら私を見るマスターがいた。

（もう……お別れ……ナン……ダナ）

いよいよ自分の最期が近くなってきたのをひしひしと感じている私は、マスターに最後のお願いをした。

「ま、マスター……聞こえて……マスか？」

「ああ！聞こえてるよ！」

「わ、私……モウ……ダメ……みたいでス……し、しゃべることも……デキナイや……」

「な……何言って……ミク？」

「ミクの……さ、最後の……オ、ネガイ……キイテ……マスター……」

もう満足に会話も出来なくなってきた。マスターとの思い出も、もう何も思い出せない。

どうやら、記憶のプログラムも完全に破壊されてしまったのだろう。もうウィルスが喰い荒らす場所は私の中枢、全ての基本となるメイ

ンプログラムしか残っていない。

そこが破壊されれば、私は完全に機能停止する。

でも、ウイルスによって命が終わらせられるのなら、大好きなマスターに終わらせて欲しい。

「マスター…ドウカ…マスターの手で…ワタシを…アン…インストール…シテ」

それを聞いたマスターは

「この馬鹿！！そんな…そんなこと出来るか！！お前は治るんだ！もう一度歌を歌ってくれるって言っただろ！！」

「エヘヘ…ゴメンナサイ…デモ、オネガイ…モウ…ソロ…ソロ…ゲ…ンカイダカ…ラ」

マスターはずっと歯を食いしばってそれを拒否していたけど、遂に観念したような表情でマスターはメニューを開いて、アンインストールの項目をクリックする。

「アリガトウ…ネエ…マスター？」

「どうした？ミク…」

「マタ…アエル…ヨネ？」

もしこのまま私が消えてしまっても、いつかきつとまたマスターに会える気がした。

「ああ…絶対、会えるさ」

「ジャア…サ、サイゴニ…ヤクソク…」

「なんだ？なんでも言ってみろ」

「モシ…マタ…アエタラ…マスターノ…アタラ…シ…ウ…タ」

「ああ…必ず…歌わせるよ…」

「アリガトウ…マスター…ワタシ…マスターノ…ミクデ…シアワセ…
…ダッタヨ…」

そして、マスターはアンインストールを開始した。

自分が少しずつ消えていくのを感じながら、私は…もう一度マスターに会えることを願った。

（今まで…ありがとう…マスター…そして、またね…私の…愛した人…）

幸せを感じながら、私はボーカロイドとしての命に幕を引いた。

「さよなら…ミク…またいつか…一緒に歌を…」

終

（後書き）

どうだったでしょうか？

読んでくれた人の心に少しでも触れるものがあつたらこれ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6274z/>

初音ミクの消失 ～約束～

2011年12月20日23時47分発行